

中日比較文化論

～日常生活を通して～

700-029 曾 黎 指導教官 千葉 貢

China—Japan Comparison Culture Study:
It lets Everyday Life Pass

Zeng Li

I. はじめに

中国と日本は一衣帯水の国であり、二千年あまりの文化交流の歴史を持っている。そのため、両国文化が相通ずるところが多いのは当然のことである。日本文化の基礎は中国からもたされたと言っても過言ではないが、同じような「文化」を出発点にしても長い歴史を経るにしたがって異質な世界を創るものである。日本民族は世界の数知れないすべての民族と同様に独自の特徴を持ち、二千年以上もの長い歴史のなかで、特定の地理、環境のもとで独特の大和文化を育んできた。日本文化の研究は中国文化を基礎としながら、他文化を巧みに融合してきた日本人の国民性の研究でもある。

II. 日本と中国の文化の同異性

「日本と中国の文化の同異性」では「日本人と中国人」、「先輩と後輩」、「礼儀と人情」の三分け、「日本人と中国人」では、島国の日本と大陸の中国という自然環境の違いに着目し、自然発生的に形成される人間性、歴史、言語等の社会環境の違いについて述べている。したがって、島、大陸という異なる風土的条件から、それぞれの歴史と文化が生まれることによって、その風土や歴史や文化の違いが両国の国民性を大きく左右させていることが分かった。具体的には基本的に日本人は集団主義者であり、中国人は個人主義者であることが判明した。日本人がいわゆる集団主義者として何をするにしても「～(だれだれ)が～(なになに)しているから」と理由づけし、常に全体の中で自分を心理的に安定させようとしていること、また日本人が本音や心に思うことをあまり言わない、これはよく世界的にも言われているが、実体験として私たち留学生が感覚としていつも

もどかしさを感じていることだが、日本人が本音を全く言わないかというそうではないと思う。日本人同士では話が通じているわけだから、会話の中の微妙な言い回しを理解していると言える。それは言葉の壁がないために、また自国の言葉をよく理解しているために言葉の裏側にあるものを何となく感じているのではないだろうか。しかしながら中国人は、はっきりと自分の意見を言うのに対し、日本はなかなかストレートに言わずに、遠回しに自分の意見を伝える傾向にあると思う。

「先輩と後輩」では、集団主義社会の日本では後輩が先輩に頼りがちの関係が非対等的でありながら、複雑に絡み合っていることを指摘した。この先輩後輩のいわゆる従属関係は日本社会の基本的な人間関係を成り立たせていることに対し、個人主義思考の中国の場合は日本のような先輩・後輩関係をそれほど重視していない。

「礼儀と人情」の中で「礼儀の国」である日本では、礼儀は人間関係を重視する社会でもっとも大切であることを指摘し、「礼」は日本社会の規範、秩序、政治、法律、習俗、教養であり、日本人の深層に根付き、日本人の生活様式と行為規範に強く影響させていると言える。これに対して中国では日常生活の中で当たり前のように口からでる言葉、例えば「おはようございます」は使うが、仕事の終わりなどに「お疲れさま」とはなかなか言わない。日本人などの外国人観光客が中国へ旅行に行った時に中国人の接客態度が悪いとしばしば指摘されるが、国営企業中心の中国では、資本主義社会のように接客＝自分の給料と必ずしも結びつかないことが原因といえる。周囲の人間に親近感や爽快感をもたせる何気ない言葉を何気なく発する、このような習慣は中国人である私たちが学ぶべきことだと思う。

III. 日常生活の中から見る日本文化

「日常生活文化からみる日本文化」においては「日本と中国の食文化の比較」、「酒と食の文化」、「中国と日本に関する数字の話」、「花に関する話」、「八仙と七福神の由来」などの日常生活における日本と中国の文化相違の具体的な事例を紹介し、日本と中国のもっとも身近な日常現象の比較から両国の文化に関して、それぞれ特徴を分析した。「中国と日本の食文化の比較」の中で私の故郷重慶を代表する食べ物「火鍋」（ホー ゴー）の例を挙げ、食に関する両国の考え方の違いを紹介し、食物と風土は非常に深い関係があることを指摘した。したがって、食文化はそれぞれの土地の文化を反映する鏡であると言える。そして、食文化が食べ物、人々の体格、生活様式、性格までに影響を与えている。「酒と食の文化」においては、酒の歴史、種類、効果、飲み方について、酒に対する文化の違いを指摘した。「中国と日本に関する数字の話」、「花に関する話」では、日中両国の数字に関する表現の違いの話から日本人の祖先崇拜の話へと展開した。「八仙と七福神の由来」の中で日本の七福神と中国の八仙の例を挙げ、七福神と八仙の歴史、物語、数字の由来について検証した。そこで、両国には様々な数字や言葉に様々な意味が存在していることが明らかになった。その言葉は文化背景と社会環境によって、また各時代によって、変化が生じていることが解明され

た。古代日本は中国の文化を大量に取り入れたにもかかわらず、導入された中国の文化は、長い歴史の中で政治的、社会的、宗教的な諸要因によって変異し、日本文化に溶け込んできた。そのため、中国の古来の風俗習慣が時折かいまみられることはあるが、すでに日本の文化に変化したと認識しなければならないと思う。いわばコピーが長い時間をかけて醸成され、変化し、オリジナルへ昇華されたのだと言える。

IV. 日本と中国の年中行事

「日本と中国の年中行事の話」の中では、「中国のお正月・日本のお正月」「バレンタインデーの商戦」「クリスマスの消費ブーム」に触れていて、「中国のお正月・日本のお正月」では、中国人にとって最も重要な祝日春節と日本のお正月について詳しく紹介し、日本の年中行事の様々な風習から、昔の中国の年中行事の風習を見出すことができた。つまり、日本文化は信仰心と自然との関わりが深いことが見えてくる。日本人は「信仰心の無い民族である」と言われることがあるが、「初詣」や「七福神巡り」、「雛祭り」などのような伝統行事を大事にしていること、また、「春分の日」、「秋分の日」などの「神」と関わる日があることから、信仰は日本の日常生活の隅々まで浸透しているのではないかと考える。それゆえ、実は日本人は「信仰心」の強い民族であることが言える。中国人も信仰心を持っており、数多くの伝統的な祭りや行事がある。新年時の寺参りや、酒の神を祭る儀式、縁日に宗教行事を行うなどは非常に中国と日本は類似している。中国人にとって伝統的な年中行事は、幼い頃からの生活の重要な一部分であり、生活習慣にまでなっており、このように、信仰心が中国と日本の社会や文化や国民性に強い影響を与えていると考えた。もともと両国はキリスト教やイスラム教に代表される一神教、すなわちキリストやアラーといった唯一無二の神を信じるのではなく、多神教、つまり様々なものに神が宿っていると考えており、このような信仰が元となり、信仰心が生活に多大な影響を与えていると思う。

また、「バレンタインデーの商戦」と「クリスマスの消費ブーム」では同じ年中行事の話でもちょっと変わった行事で、日本化されている西洋の典型的な行事バレンタインデーとクリスマスについての例を挙げた。日本も中国も年中行事について伝統的なものは意外に残っていて、世の中が変れば行事の種類や内容も変わるのは当然で、昔のままではないが、変わったのが商業化したという点であることを指摘した。

V. 日本人の美意識を探る

「日本人の美意識」では「美について」、「茶の世界」と「庭園の美」の三つに分け、日本の伝統文化である茶道、日本文化の深層である日本庭園の例を挙げて、中国人と日本人の美に対する意識、感覚を比較しながら考察した。日本の神道も仏教も大変自然崇拜の色彩が強く、日本の大和絵にし

でも、水墨画にしても、そのほとんどが自然のみを描いている。そして日本の和歌も中国の影響を受け、詩を学び、自然と恋の和歌（短歌や俳句）を詠む。両国は漢字文化と儒教文化を共有しながらも、両国間には様々な違いが見られる。その中で、両国の風土、言語、国民性の対比から、両国の文化の同質性と異質性を考察できた。特に「茶の世界」の中では、茶の起源、茶の効用、茶の飲み方などを紹介し、日本文化と中国文化の同質性と異質性について、茶の湯という分析視角から検証してみた。

VI. 終わりに

以上、中国と日本の国民性、人間関係や物の考え方、食文化、年中行事などの伝統文化の相違を比較研究しながら、日本文化のルーツを探ることで、日本と中国の文化は類似性を持っていることが確認できた。日本は古くから中国文化の強い影響を受け、文字や民俗、社会制度などは中国に相通ずるところが多い。これらの文化の一部は残っており、日本の現代文化にも大きな影響を与えている。その反面、中国の近代化の過程の中に、近代日本文化の影響を受け、日本文化発展の経験と教訓を考察することは中国の参考になると考える。

この研究を通して中日文化は相違性をもっていることが分かってきた。日本と中国はそれぞれ違った民族であり、違った社会発展の過程を歩み、相異なる自然地理環境を持っているので、文化も豊富多彩で独自の特色がある。「違う」から文化摩擦を起こすとか、あるいは文化衝突を起こすとかについて書いている人が多い。中国の生活様式が現代の日本人に合わなかったり、文化のギャップで戸惑ったりすることも多々ある。けれども私はこういう摩擦や衝突というのはあたりまえのことだと思う。こういう摩擦や衝突があるからこそ、この社会の発展を可能にすることができる。その相違を恐れる必要はない。その相違を楽しむということが何よりも貴重なものではないだろうか。そこに、両国の歴史や伝統を知ることの意義がある。だから、私にとって、両国の歴史、伝統を知することは自分のあり方を考えていく上で極めて大切なことである。

参考文献

- | | | | |
|------------------|-------|---------|-------|
| 1. 『酒の日本文化』 | 神崎宣武 | 角川書店 | 1991年 |
| 2. 『中国の食文化』 | 周 達生 | 創元社 | 1989年 |
| 3. 『日中年中行事辞典』 | 鈴木棠三 | 東京堂 | 1977年 |
| 4. 『福神信仰』 | 喜田貞吉 | 宝文館 | 1976年 |
| 5. 『茶の文化史』 | 村井康彦 | 岩波新書 | 1979年 |
| 6. 『現代社会と民俗』 | 松崎憲三 | 名著出版 | 1991年 |
| 7. 『禅と日本文化』 | 鈴木大拙 | 岩波新書 | 1978年 |
| 8. 『中日民俗の異同大和交流』 | 賈惠萱ほか | 北京大学出版社 | 1993年 |
| 9. 『日本人論』 | 南 博 | 岩波新書 | 1994年 |
| 10. 『タテ社会の力学』 | 中根千枝 | 講談社 | 1978年 |